

## 引喩と暗喩（九）

——源氏物語における白氏文集、「予与微之云々」など

中西 進

一 予与微之老而無子発於言歎著在詩篇今年冬各有一子  
戯作二什一以相賀一以自嘲——柏木

白楽天は太和三年（八二九）の冬、五十八歳をもって男子の父となった。洛陽に帰ってきた冬、阿崔が生まれたのである。

白にはすでに三十八歳の時（元和四年、八〇九）に女兒の金鑾が生まれていたが、金鑾は三年後に死んでしまう。しかも今度は男児だったから、なおのこと喜びが大きかったらしい。

さらに、この同じ年に元稹にも男児道保が生まれ、その偶然がいっそう白楽天を喜ばせた。その中で白楽天は一篇の詩を作った。

「予と微子と老いて子なし。言歎に発し、著詩篇に在り。今年冬各々一子あり。戯れに二什を作り、一は以て相賀し、一は以て自ら嘲る」（予与微之老而無子発於言歎著在詩篇今年冬各有一子戯作二

什一以相賀一以自嘲）がそれである（文集卷二十八）。題はいささか長いので、以下自嘲詩とよぶことにしよう。

詩の内容は次のごとくである。

常に憂ふ老に到つて都て子なきを  
何ぞいはんや新たに生れまたこれ児なるをや。  
常憂到老都無子  
何況新生又是児

陰徳 自然よろしく慶あるべし  
皇天 知るなしと道ふを得べけんや。  
陰徳自然宜有慶  
皇天可得道無知  
一園の水竹いま主をなす  
百卷の文章さらに誰にか付せん。  
一園水竹今為主  
百卷文章更付誰  
慮るなけれおもんばか鵷雛の浴する処なきを  
即ちまさに重ねて鳳凰池に入るべし。  
莫慮鵷雛無浴処  
即応重入鳳凰池

五十八翁はじめて後あり

静かに思へば喜ぶに堪へまた嗟くに堪へ

たり。

五十八翁方有後  
静思堪喜亦堪嗟

一珠はなはだ小にして還りて蚌に慚ぢ

一珠甚小還慚蚌

九子は多しといへども鴉を羨まず。

九子雖多不羨鴉

秋月 晩く生ず丹桂の実

秋月晩生丹桂実

春風 新たに長ず紫蘭の芽。

春風新長紫蘭芽

盃をちて祝願するに他の語なし

持盃祝願無他語

慎んで頑愚なんちの爺に似ることなかれ。

慎勿頑愚似汝爺

ところで、源氏物語の中にこの詩が登場する。

「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と、うち誦じたまふ。五十八

を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、

いとものあはれに思さる。「汝が爺に」とも、諫めまほしう思

しけむかし。

(柏木)

この直前柏木はすでに死去しており、月改まった三月、ここで薫の五十日の祝いが行なわれようとしている中で、源氏が右のように口誦し、白詩と年齢をくらべて自分が今年四十八歳であることを思い、ふたたび白詩を引合いに出して薫によりかけている。

このあり方からみれば、自嘲詩の応用は誰の目にも明らかである。近來の注釈書も研究者も、ひとしく引用を認めるところである。

ただ、自嘲詩が「静思堪喜亦堪嗟」とあるところが源氏では「静

かに思ひて嗟くに堪へたり」と見えていて、小異がある。これは故意だったのだろうか、偶然だったのだろうか。そのことをふくめて、この引用を考えてみよう。

そもそも源氏のこのあたりは、全篇の中でもっとも衝撃の大きい女三の宮と柏木との密通を語る部分であり、さらにその中でも、不義の子の出生を祝う場面である。しかも子の父は「心の鬼」によって殺されている。作者が渾身の力をこめるのでなければ、うそであらう。

源氏物語のこのあたりを詳しく見ると、源氏はまず薫を抱きあげて、

「あはれ。残り少なき世に生ひ出づべき人にこそ」 (柏木)

という。わが残生の子だというのである。

しかし無心な子は「いと心やすくうち笑みて」かわいい。

一方夕霧などわが子とも似ていないし、娘から生まれた子たちほどには気品がない。というのは、「残り少なき世」といってわが身と赤子との関係を考えてのとうらはらに、この子が自分の本当の子でないことをあからさまにするくだりである。そこで、

この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。

柏木とて大臣家の息であり、わが妻妾の上とは血を分けた男である。けして卑賤の身ではないのに、この書きようは源氏の「心の

鬼」の現われとも見られ、すでに人間としての薫の苦悩が運命づけられていると考えられる。それを源氏は「あはれ」と見るのである。

ところで、こうして容貌からたぐり寄せられてしまう不義は、何もこの子の責任ではない。いわば運命のような出会いの中に女三の宮と柏木とがあり、その出会いの運命からこの子が生まれ、そして五十日も待たずに父は死んでしまうことになる。それを一人で考えつづけると、

あはれ、はかなかりける人の契りかな、

と思う。そうなるともう涙もとどめるわけにはいかない。泣いてはならぬ祝いの事の日だと思うのに。

源氏が文集を思い出すのは、これらの結果である。自嘲詩を口ずさみ、もう四十八歳になったことを考えると、

末になりたる心地したまひて、いともあはれに思さる。

のである。

統計的にいうのではないが、このわずか四百字でいどの字数の中で、「あはれ」が四回も登場することは、やはり特別なことではないだろうか。いかに源氏物語を「あはれ」の文学だといっても、これほどに心の感受を訴えようとする場面はそう多くはあるまい。

この特別さを手がかりとして整理してみたのが右だったのだが、それによると源氏の薫に対する思い入れは、まず第一に残生の子だという点、第二に尊貴な親をもたない出生である点、第三に五十日

にしてすでに父を失っていることを中心として人間関係の「契り」がはかない点、そして第四にわが命の衰えを考える点にある。

最初と最後は似ていながら多少ずれていて、最初の子の親が老年だという点に中心があり、最後は自分自身の老年の嘆きにある。この首尾の照応の中に、親であり子であることの因縁、一つの默契を感じているのであり、見事な構成だと思われる。

裏がえしにすれば冷泉帝も同じであろう。ここには「不義」というものの本質までも述べようとする態度が見られ、作者はこのクライマックスの重さに十分堪ええたと思われる。

さてそこで、このクライマックスに白詩が引用される必然性は、はたしてあったのだろうか。

かりに簡単に源氏物語を読みとばしていくと、右に述べた首尾が目立ち、とくにきつちりと年齢を数えているから、老年の子だというところだけを応用したように見える。

しかし、この場面の最大の結論が「汝が爺に」と諫めたいというところにあることは、いうまでもない。

慎んで頑愚なんぢが爺に似ることなかれ

というところにこめられた、老源氏の万感の思いがそれである。もちろん作者は読者が自嘲詩を知っているという前提がある。そうでなければ「汝が爺に」とだけ言うのでは意味がない。

光源氏は、自らを頑愚だと感じたのである。頑愚とは何か。白樂

天にあっては、多少とも辺境に貶せられるような言辭を弄するところに頑愚があったであろう。これほど元稹との交友を守りつづけるのも、逆にいった頑愚かもしれない。

しかし光源氏に頑愚を当てはめてみると、これはまたじつに巨大な意味が詰めこまれているではないか。さし当っては頑愚なのは柏木であろう。このような事件をひき起こすまでに女三の宮に執着したのだから。

しかし、それをいま自分に、同じように考えているとなると、光源氏の過ぎ来しが、いっきよに浮かび上がってくる。事はむしろ、柏木事件より藤壺事件なのだ。柏木事件はその裏がえしにすぎないことを、読者はいま当事者自身の口から、聞くことになる。

それでいながら、あのように柏木をせめ殺すに到った陰惨な光源氏の情念も、頑愚に他ならない。頑愚に操られているにすぎない人間の一生。

それを光源氏はしみじみと感ずるのであろう。そうならば、

盃を持ちて祝願するに他の語なし

といわざるをえない。他にことばはない。頑愚であるな、という願いを光源氏が薫に願うばかりだということを、作者は白詩を通していいたかったのである。

人間、頑愚であるなといわれても、そうやすやすと頑愚の性から逃れられるものではあるまい。人間はもっと大きな力に撈めとられ

ているのだから。

その大きな力は親子関係を作り、人間の「契り」を仕組む。白詩によれば、

陰徳 自然によろしく慶あるべし

皇天 知るなしと道ふを得べけんや

というところである。これらの詩句が、まず最初に源氏が「残り少なき世に生ひ出づべき人にこそ」といった時から、暗示されていたというべきだろう。

「陰徳」には自注があつて「于公陰徳あり、その後蕃昌す」（于公陰徳 其後蕃昌）といい、白詩によれば子が生まれるのは陰徳によつてだという。漢の獄吏于公は隠れた徳行の持主で、そのために子の于定国は丞相となつたという。

また「皇天」の句にも自注があつて「皇天知なく、伯道児なし」

（皇天無知 伯道無児）とある。晋の鄧伯道はわが子を死なせた後、子に恵まれなかつたので、時の人が天道に知がないと歌つたことをいう。伯道は甥を助けるためにわが子を犠牲にしたのだから、天は子を授けてもよいではないかという気持である。

こうしてみると、子が生まれるというのは天とか陰徳とかという頭在しないものによつてつかさどられていることになる。自分を苦悩におとし入れた柏木にも、陰徳があり天道の知があつたのであり、三十年前の光源氏自身にも十八歳の身に陰徳があり、天道の知ると



ころがあつたことになる。

これらは白詩を重ねた後の源氏物語の中では、いっきよに「契り」といいかえられる。「はかなき契り」というのは柏木の短命ばかりをいうのではなく「契り」そのもののはかなさ、不可視のものに委ねられているゆえのはかなさを含意するであろう。

とりわけて今は、白樂天の陰徳は五十八歳にして男児を生むめぐり合わせとして姿を現わした。それを、

秋月 晩く生ず丹桂の実

という。光源氏でいえば「残り少なき世に生ひ出づべき人」が丹桂の実である。

そして源氏物語の読者がさかしく白詩を思い出してくれるとすると、薫は丹桂の実となる。つまり才能ある人物としての成長を願う気持が、裏がわにひびいているのである。

だから、それはつぎの句、

春風 新たに長ず紫蘭の芽

となる。薫は十分に祝福されていることを、読者は読みとるべきであらう。

しかし、いま複雑なのは、またしても光源氏の子ではないことである。一方で残生の子といいつつ、忽ちに他の子とは似ていないとか、王氣づいていないとか、さらには直接に柏木を「なほいとおぼえたりかし」とまでいうことになる。

その結果が「おほかたの世の定めなきも思しつづけられて」だった。これほどの複雑な人間関係を「世の定めなき」といつてしまうのはおおまかにすぎる気もするが、古来日本人が「契り」とか「定め」とかという単語に委ねて説明をつつしんできた態度を思えば、まさに秋月にえた丹桂の実も、春風の中の紫蘭の芽も、そしてまた柏木の陰徳や天道によるものでありながら残生の子だと嘆くことも、いっさいは「定めなき」でよいのであろう。

そんな状況をよそに、赤子は「つぶつぶと肥えて白うつくしく、」「いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がち」であつて、「まなこゐののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかしき顔さま」である。

これを一ことでいえば「一珠」である。真珠の一粒が薫であつた。そして一方の周辺、とりわけて光源氏の心底を一ことでいえば「蚌」なのではないか。

一珠はなほだ小にして還りて蚌に慚ぢ  
というように。

きよらかな真珠をとりまく肉塊、アコヤ貝にしてもアワビにしても、また蚌（ハマグリ）にしても、この比喩は源氏物語における大人どもの醜い相姦と愛情を、これ以外のこともないほどに、よく表現しているのではないだろうか。あえていえば「蚌」という白樂天の表現を演繹するかのごとくに源氏物語は書かれているのである。

こうなると、白詩のもっていた「一は以て相賀し、一は以て自ら嘲る」という内の「相賀し」は、はなはだ印象が薄い。むしろ邪魔だといった方がよい。源氏物語が、

静かに思ひて嗟<sup>なげ</sup>くに堪へたり

と云って白詩の、

静かに思へば喜ぶに堪へまた嗟くに堪へたり

といった「喜ぶに堪へ」を削除してしまったのは、当然の処理であつただろう。

そこで引用された白詩には「自ら嘲る」しか残っていない。この引き算こそが源氏物語の作者の最大の眼目であつただろう。まさに源氏物語は、白楽天の自嘲を、ここにひびかせたかつたのである。

いま光源氏はコキューの身を自嘲するしかない。身の過去がなければ激しい憤りや怒りになるべき心は、いまそうなることができない。そして源氏物語という作品は、そんな単純な事柄には目をくれない。

この自嘲からは、どういう結論が生まれるであらう。たった一つ、慎んで頑愚<sup>けんぐ</sup>なんちが爺に似ることなかれ

しかないではないか。ともどもの爺を思い浮かべながら。すなわち、人間なるものを思い浮かべながら。

ちなみに阿崔は三歳にして夭折している。金鑾について、またしてもというべきであらう。

このことは薫の生い立ちとは別である。ただ、こんな薄幸も自嘲の詩を思い浮かべた読者はただちに連想したわけだし、将来長く生きるということはこの時点では知らされていないのだから、いっそう翳りは深く、自嘲はぶきみにひびいたにちがいない。

## 二 府西池——藤裏葉

白楽天は六十歳の時（太和五年、八三二）洛陽にあって河南の尹であつた。前年十二月に任命されたものである。

そしてこの年は多難の年で、初秋のころ先にあげた阿崔が死んだ。また程なく七月二十二日、かの元稹も死ぬ。遠隔の武昌の地においてである。

しかし早春の白楽天はそれらを知るよしもない。役所（府）の西の池にのぞんで次のような詩も作っている。

### 府西池

柳 氣力なくして枝まづ動き

柳 無氣力枝先動

池に波文あつて氷ことごとく開く。

池有波文冰尽開

今日 知らず誰か計会せる

今日不知誰計会

春風 春水 一時に来る。

春風春水一時来

（卷二十八）

白楽天はこの前後の洛陽時代の自作について平静な喜びの記録だという。もちろん兄や友の死への詩を別にしての話だが、たしかに

この詩も平明で穏やかな一篇といえるであろう。<sup>(2)</sup>

こうした平明な風景詩は日本でよく好まれる。その例は多いが、この詩も『和漢朗詠集』に前半、後半ともどもに採られ(春)、『千載佳句』(立春)にも、これまたともどもに掲げられている。

また和歌にも利用され、

谷かぜにとくるこほりのひまごとにうちいづる波や春のはつ花

源当純(古今集巻一、春上)

はつ春のうたとて

水のおもにあやふきみだる春風やいけの水をけふはとくらむ

紀友則(後撰集巻一、春上)

といった例が見られる。

また同時代の物語としては『栄花物語』(巻三十四、暮まつほし)には直接に、

柳著たる人は、浪の形を白き糸して結びて氷せさせて、「柳気力なくして」といふ詩の心なるべし。池に浪の文あり。氷尽く開けたり。

と白詩が言及されている。

これらを見ると白の「府西池」が平安朝の人びとにいかに愛好されたかが知られるであろう。この傾向を作ったものが『和漢朗詠集』にあることは、他の類例とひとしい。

さてそこで府西池の応用が源氏物語にもあるとする見方がある。<sup>(3)</sup>

水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしき、まことに斧の枝も朽いつべう思ひつつ、日を暮らす。

(胡蝶)

この「波の綾に文をまじへたるなど」という個所が、白詩の第二句「池有波文」を応用したものと見るのである。

この見方は正しいであろうか。源氏物語は池の波の上を鴛鴦が泳いでいて、その模様が波のいろどりに混入するというのだから「文」は鴛鴦の模様のことであって、波がつくる模様ではない。「波の綾」というものこそ白詩の「波文」に当るが、これは「文」とはいつていない。その点では、白詩と源氏物語とは表現を異にする。それを安易に同一視することはできない。

しかし私には「文」という単語が気になる。これは「あや」とほとんど同じ意味を示す漢語であろうが、このほぼ同義語を使って波と鴛鴦の作りなす模様を表現したのではなかったろうか。すなわち「鴛鴦の波の綾に文をまじへたる」といえば、結果的に鴛鴦が作るものも波の文であり、本来の波の綾とそれが一体となる、というぐあいである。

そこで「文」だが、この漢語の一語は当時単なる模様よりはパターン化したデザインを意味していたように思われる。辞書をたよりにいえば『大和物語』(二五九段)の、

雲鳥の紋の綾をや染むべき

は「雲鳥紋」とよばれる一定の模様、むしろ今日の家紋のようなものを内容とするように思われる。

また同じ作者の手になる『紫式部日記』（二五）の、

唐衣は松の実の紋、裳は海浦を織りて、

も同様である。ことに「海浦」とだけいって「大波、藻、魚貝など海辺にちなんだ模様」（古典全集本頭注）を示すとすれば、すでに型がきまっていなければならない。それと同じものが「松の実（松笠）の紋」だったのではないか。

こうした固定化こそ「文」と漢語でよばれる語が「あや」とは別に存在した理由だと思われる。

もちろん固定化した紋も、本来は一般的な模様だったはずで、たとえば上掲の『栄花物語』が、

柳著たる人は、浪の形を白き糸して結びて氷せさせて

というのも任意の模様で、こうしたものがやがて固定化してゆくのであろう。しかしこの場合も、つづけて「『柳氣力なくして』といふ詩の心なるべし」というように、詩を暗示するデザインとして施されたもので、それは「文」とよばない。

源氏物語の「胡蝶」をこうした周囲の中においてみると、やはりこの叙述の前に、私も「『柳氣力なくして』といふ詩の心なるべし」といいたくなる。右にあげた「文」とはまったく異質だからである。

しかも心にくい。作者は「鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど」といっておいて、「物の絵様にも描き取らまほしき」というのである。このかぎりにおいて紋様としての「文」は誤っていない。もし私の見込みに間違いがないとすれば、府西池の詩の引用は、巧みに紋様としての「文」に収斂されているというべきだろう。

総じて作者はこのあたりをまるでジグソーパズルを作るように、あちこちから材料を集めてきては一枚の絵を作り上げる。すぐ前にも「はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり」といい、きわめて平面的に、美しい情景をモザイクのように集めてくる。

そこに動員される中で、白詩はもっとも重要な材料の一つであった。すでに述べたように<sup>(4)</sup>、当該個所の二つ前の文、

廊を繞れる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり

は文集の「傷宅」を引くものであり、後に出る和歌、

亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ  
は同じく「海漫々」によるものであった。この流れも当該個所に白詩を想定することを支えているであろう。その場合、先立って、色を増したる柳枝を垂れたる

とあることと、よくひびき合うであろう。

さて、このように引用されたとなると、六条院の春の町は、いっそう春色を深める。こちらはすでに三月の下旬であり、立春といっ

た季節ではないが、

春風 春水 一時に来る

という駘蕩とした春の趣は六条院にもみちわたる。

この白詩の巧みさは柳を動かすものが春風であり、氷をとくものが春水であって、この二者が計らずも一時に来たことに興じる点にある。だから胡蝶の情景とは一致しないが、もし胡蝶に府西池を重ねて読む読者がいれば、関心の中心は、

知らず誰か計会せる

に集まってくると思われる。もちろん「誰」に人間を当てるわけにはいかない。天地の摂理といったものが人間の知恵を越えた世界で計会しているのであろうから、春の町に麗景をあたえ、この繁栄をもたす原因となるものは、まさに「誰」かの計会なのだということになる。

白詩がもっている春色の平穩さは、大きな自然の中の一つとして、六条院の春をいっそう華やかなものとしてくるであろう。

すでに、白みずからが太和三年（八二九）から太和八年（八三四）の自作について感懷を述べていることはふれたが、くわしくいうと、三年の春より八年の夏に至るまで洛に在ること凡そ五周歲、詩を作ること四百三十二首、朋を喪ひ、子を哭く十数篇を除く外の、その他はみな懷おもひを酒に寄せ、或いは意を琴に取り、間適して余りあり。酣樂暇あらず、苦詞一字もなく憂歎一声もなし。

自三年春至八年夏在洛凡五周歲作詩四百三十二首除喪朋哭子

十数篇外其他皆寄懷於酒或取意於琴間適有余酣樂不暇苦詞無

一字憂歎無一声

のごとくである。<sup>(5)</sup>そしてこのさまは府西池一篇をとってみても、うなずくことができる。源氏物語が要請したものは、まさにこの酣樂の趣であつたろう。

ところが読者は、この年に「喪朋哭子」という例外の詩を作らざるをえなくなる白樂天を、知っている。聡明な読者は、この不吉な未来を忘れて六条院の榮華を、読むことができないであらう。

源氏物語の作者が府西池という白六十歳の春の詩を引いた理由も、じつはそこにあったのではないか。誕生をあれほど喜んだ阿崔の死、分身とすら思えた元稹の死、何もよりによって、そんな不吉な年の詩を源氏物語の作者が引くことはなかったのではないか、そういう疑問もきこえて来そうだが、それを意図的に行なったのは、この榮華がじつは未来に悲嘆をはらんでいるものなのだということを、訴えたかったからである。

その意志は「廊を繞れる藤の色」と文集から傷宅を引いた意志と、軌を一にする。先の稿で私は「胡蝶」の美しい風景は、やがて滅びるべきものであった」と書いた。

またこの個所に引かれた海漫々についても先稿で問題としたが、この海漫々にも「仙を求むるを戒むるなり」（戒求仙也）という自

注がつけられており、「胡蝶」が六条院を蓬萊とすることへの批判的な引用であった。ここに集う人びとにも、やがて老が来るという作者の主張が、海漫々の引用となったのである。

とすると、ここに府西池を引き、やがて直面する死の悲劇を暗示したとなると、三者の引用はすべて同じ方向をさしているではないか。平穩は、まるで平穩を獲得した代償として要求されるような破綻を、つねにともなっている。そうした哲学から源氏物語の作者は自由になれないのである。

### 三 北窓三友——末摘花

白樂天は琴と詩と酒とを三人の友と称した。くり返し白はこの三者を歌うが、もっとも有名なものは、例の「殷協律に寄す」（寄殷協律）であろう。

五歳 優遊して同に日を過し

一朝 消散して浮雲に似たり。

琴詩酒の伴はみな我を抛ち

雪月花の時もつとも君を憶ふ。

幾度か雞を聴いて白日を歌ひ

またかつて馬に騎りて紅裙を詠ず。

吳娘の暮雨蕭々の曲

江南に別れてよりさらに聞かず。

五歳優遊同過日

一朝消散似浮雲

琴詩酒伴皆抛我

雪月花時最憶君

幾度聴雞歌白日

亦曾騎馬詠紅裙

吳娘暮雨蕭々曲

自別江南更不聞

太和元年（八二七）五十六歳の作。かつて杭州、蘇州にあったころの「江南の旧遊を叙」（自注）したもので、そこで琴、詩、酒を友とした友人をなつかしむ詩である。

そして白樂天はさらにこの三種そのものを友とよび「三友」といった。それが「北窓三友」（巻二十九）の一篇である。

今日 北窓の下

自ら問ふ何の為すところぞと。

欣然として三友を得たり

三友とは誰とか為す。

琴罷んではすなはち酒を挙げ

酒罷んではすなはち詩を吟ず。

三友遞ひにあひ引き

循環して已む時なし。

一たび弾けば中心に愜ひ

一たび詠ずれば四肢を暢ぶ。

なほ中に間あるを恐れ

酔をもつてこれを弥縫す。

あに独り吾のみ拙好ならんや

古人多くはかくのごとし。

詩を嗜むに淵明あり

琴を嗜むに啓期あり。

今日北窓下

自問何所為

欣然得三友

三友者為誰

琴罷輒拏酒

酒罷輒吟詩

三友遞相引

循環無已時

一彈愜中心

一詠暢四肢

猶恐中有間

以醉弥縫之

豈独吾拙好

古人多若斯

嗜詩有淵明

嗜琴有啓期

酒を嗜むに伯倫あり

三人はみなわが師なり。

あるは儋石の儲けに乏しく

あるは帶索の衣を穿つ。

絃歌してまた觴詠し

道を樂しんで帰る所を知る。

三師去りてすでに遠く

高風追ふべからず。

三友に遊ぶことはなはだ熟く

日としてあひ随はざることなし。

左に白玉の卮を擲ち

右に黄金の徽を払ふ。

興酣にして紙を畳まず

筆を走らせて狂詞を操る。

誰かよくこの詞を持して

わが為に親知に謝する。

たとひ以つて是となさざるも

あに我を以つて非となさむや。

さてこの三友が源氏物語に登場する。<sup>(6)</sup> 末摘花と通称される女性の

ことを、源氏がはじめて大輔命婦から聞くくだりである。

「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはず。かいひそめ、人

嗜酒有伯倫

三人皆吾師

或乏儋石儲

或穿帶索衣

絃歌復觴詠

樂道知所歸

三師去已遠

高風不可追

三友遊甚熟

無日不相隨

左擲白玉卮

右払黄金徽

興酣不疊紙

走筆操狂詞

誰能持此詞

為我謝親知

縱末以為是

豈以我為非

うとうもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひ

はべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」

と命婦が源氏に言うのと、

「三つの友にて、いまくさやうたてあらむ」 (末摘花)

と答え、末摘花の琴を聞きたいと所望する。

ここに「三つの友にて」とわざわざいうのは三友を意識してのこ

とだし、さらに先立って命婦が「琴をぞなつかしき語らひ人と思へ

る」というのは、明らかな伏線である。むしろ命婦から暗示された

結果が「三つの友にて」であろう。

「いまくさ」とは酒のことである。軽い冗談をまじえたものだろ

うか。

そこで、命婦が琴をよくするといい、そのまま琴を聞きたいと筋

が進んでもよいものを、わざわざ三友に言及した意図が考えられな

ければならない。たんに酒は飲まないのだろうねといったために、

三友を出したのであろうか。

命婦が「語らひ人」つまり友とするといったときに三友はすでに

決定していた。すなわち三友をもち出したのは命婦で、冗談はその

上でのことであつた。命婦をしてこういさせたところに、源氏作者

の意図があつたと思われる。

この意図は一見奇異に見える。末摘花という若い女性に琴、詩、

酒でもあるまいという疑問は、誰にでもわくであらう。



しかしそうならそうであるほど、引用の強い意図を考える必要がある。いかなる意図か。

そもそも「北窓」は長い伝統をもつ詩語だが、そのニュアンスは微妙である。同じく琴や詩を扱うにしても、

西窓明るくかつ暖かなり

西窓明且暖

晩に坐して書帷を巻く

晩坐巻書帷

……

(琴酒に対す 卷三十)

といった「西窓」と違い、内省的で思索的な寒冷さをもつものが「北窓」である。そのために「北窓」は何もほかになすところもなく欣然として三友と親しむところであった。

そこに一つ、末摘花の境遇と通い合うものが情景として設定されていることが知られるであろう。

そしてまた、白楽天が三友を好む所以は、「楽道知所帰」にある。この「所帰」に生活の中心を求める生き方こそが世俗と切離された精神のけ高さにつらなっていくであろう。末摘花の琴は父ゆずりのものだという。

我に聞かせよ。父親<sup>みこ</sup>王の、さやうの方にいとよしづきてもものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじとなむ思ふ。

(同)

というのが源氏の意見である。常陸宮の血を引き、しかも、いという荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古

めかしう、ところせく、かしづきすあたりけむなごりなく

(同)

住んでいる姫君にとって「北窓」に「楽道知所帰」三友をたしなむ心は、殊の外に大事だったと思われる。

こんな境遇の中で姫君は「一弾愜中心」という情態であったにちがいない。こうした心の内面を白詩によって語ることに、源氏物語の作者は成功しているように思われる。

しかしこの三友の好みは「拙好」だとされる。末摘花は生き方に拙ない。それなりに誠実でもあって、後のち源氏が捨てない所以ともなっているが、いまは一途に荒れはててゆく生活に、何のなすすべもない。この拙なさも、白詩によって強調されるものであろう。

そしてその上で、もっとも「北窓三友」が強烈にひびかせてくる音色は、

或乏儻石儲 或穿帶索衣

からくるものであろう。前者は食糧の貯えがとぼしいことをいい、後者は粗末な服装を意味する。ここに強調されるものは貧である。

この「北窓三友」は太和八年(八三四)六十三歳の時の詩で、すでにふれた洛陽五年間の詩の最後の年の作である。自序によれば「皆寄懷於酒 或取意於琴 間適有余酣」といった生活の中のもの、けして悲惨な貧困の中にあつたというわけではないが、清貧が彼を喜ばせている趣がある。とくにここでも酒と琴とをとり上げる

あたり、この両者に優雅な生活の中心を求めているようである。

その点実際の貧困を意味するのではないが、やはり世俗の榮耀・高貴を捨てて心の高さを示す手段として、三友を考えていたといふべきだろう。

それを端的に示す三友詩を、白樂天は同じこの年に作っている。

「詩酒琴の人は例多く薄命なり。予<sup>われ</sup>酣<sup>はな</sup>三事を好み、雅にこの科に当りて得る所すでに多く、幸せらるること斯<sup>こゝ</sup>に甚し。偶<sup>たま</sup>ま狂詠を成し、聊<sup>いささ</sup>か愧懷を写す」(詩酒琴人例多薄命予酣好三事雅当此科而所得已多為幸斯甚偶成狂詠聊写愧懷)(卷三十二)がそれである。

琴を愛し酒を愛し詩を愛する客

愛琴愛酒愛詩客

多くは賤しく多くは窮し多くは苦辛す。

多賤多窮多苦辛

中散歩兵終に貴<sup>たか</sup>とからず

中散歩兵終不貴

孟郊張籍貧に過ぎたり。

孟郊張籍過於貧

これを一<sup>もつぱら</sup>にしてすでに命に關はること

一之已歎関於命

を歎く

三者なんぞ併せて身にあるに堪へん。

三者何堪併在身

ただ飄零して草木に随ふべし

只合飄零随草木

誰か凌厲をして風塵を出でしめん。

誰教凌厲出風塵

榮名厚祿二千石

榮名厚祿二千石

樂飲間遊すること三十の春。

樂飲間遊三十春

得べし 厭ふことなき時に咄々たるを

可得無厭時咄々

なほ言ふ 薄命人に如かずと。

猶言薄命不如人

いささか自嘲の気味もあり、愧懷を写すというが、要は詩、酒、琴を好む人が薄命であり、賤・窮であり、また辛苦するという世の例をあげて、わが身を顧みるのである。孟郊も張籍も貧しかったといふ。

そしてこの詩を「北窓三友」と同じ年に書いていることをもってすれば、三友に親しむものが貧しく薄命だったとする考えは、三友詩にも共通するはずである。

源氏物語の作者が三友なるものを思い浮かべた時、その周辺に漂っているものはおよそ以上述べたようなものであった。再言すれば中心は「或乏儋石儲 或穿帶索衣」ということばにまとめられるような貧と賤、また「拙好」と称せられるような生活の拙なさ、そして薄命である。

これらを末摘花の周辺に考えることは、きわめて適切ではないか。末摘花も常陸宮の女という身分にもかかわらず、いまは貧賤で、帶索衣まがいだ古めかしい服装以外には着るものもない。彼女は後のち生きながらえるにしても、印象はいかに薄命の女である。

この三友の楽しみが、じつは「所帰」の本質をもっている、やはり白詩は忘れ形見の女の翳りのために引用されたと思われる。

四 六十六——藤裏葉

白樂天の「六十六」なる詩の題は、單純に白が六十六歳の時に作つたための題名である。その詩を掲げてみよう（卷二十九）。

病みて知る心力の減ずるを

老いて覺る光陰の速きを。

五十八にして歸り來つて

今年 六十六。

鬢糸は千万に白く

池草は八九緑なり。

童稚は尽く人と成り

園林は半ば喬木なり。

山を看て高石に倚り

水を引きて深竹を穿つ。

潺湲ぜんぜんの聲ありといへども

今に至つて聴くにいまだ足らず。

右からも知られるように帰洛後八年、あの「洛詩に序す」に見られる心境はここにも持続しているが、しかし老衰の氣持も看過できない。この詩はそれを半ばとして、一方に成長する若い生命をおいて、その対比を歌った詩であつた。

さて、この詩を引用したとする説がある。いつも引く近代の研究

書もそれを認める。<sup>(7)</sup>

昔おぼえて、あはれに思ふさまなる御住まひなり。前裁ぜんさいどもな  
ど小さき木どもなりしも、いと繁しげき蔭かげとなり、一叢いつそう薄はくも心にま  
かせて乱れたりける、つくろはせたまふ。遺水ゆすいの水草みくさも掻かきあ  
らためて、いと心ゆきたるけしきなり。

（藤裏葉）

とくに白詩の「園林半喬木」が近いであろうか。

ただ、こうした庭園の木が繁茂するようになったというのは、どこにでも見られる描写で、この両者を並べてみて、排他的に両者を關係づけることは、一見むつかしいのではあるまいか。

じじつ、ここには、

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

御春有助（古今集卷十六）

による表現だという指摘がある。<sup>(8)</sup>

もっともこれも「ひとむら薄」が共通するだけだし、まして野辺となつたというのでは当面の情況とは逆である。

この個所は夕霧が「御勢まさりて、かかる御住まひもところせければ、三条殿に渡りたまひぬ」という具合で、夕霧が中納言となり、いつそうりつばな邸に移るというので故大宮のいた三条宮にやつてきたところである。野辺などというものではない。

それでは、ここに詩も歌も引用はないのだらうか。私は古來認めてきたように、白詩があると思う。しかもきわめて陰微な形で。と

いうことは、きわめて巧妙な手段、である。

じつは大宮の邸の三条邸と夕霧夫妻は、並々でない関係をもつ。

夕霧は母の葵の上も死去し、祖母たる大宮のもとで育つ。源氏が須磨へ退居する時も夕霧と別れを惜しんだのは三条邸で、

「久しきほどに忘れぬこそあはれなれ」とて、膝に据ゑたまへる御気色、忍びがたげなり。  
(須磨)

というのは、夕霧五歳の折であつた。

そして三条邸で元服したのは十二歳（少女）、二条東院に移つてからも三条邸とともに育つた雲居雁が忘れられず、ついに七年ごしの恋を許されたのは、この年になってからである（藤裏葉）。時に十八歳。その秋の今、雲居雁と、なつかしい三条邸に戻つて来たのだった。

あの時の五歳の小童は、今や十八歳となり、妻ともどもに庭を眺めている。そこには長い歳月の移り変りがある。それこそ「小さき木どもなりしも、いと繁き蔭とな」っていた。雲居雁は二十歳になつている。この二人の成長は、

童稚尽成人

といつてよいであらう。そこでこそ、

園林半喬木

というのも生きてくるのであって、物語の展開に「童稚云々」をゆだね、その上で表現として「園林云々」を筆にしたものにちがひな

い。

長い歲月の間に三条邸は少しずつ描写される。

時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮に、  
(少女)

御前の梢ほろほろと残らぬに、  
(同)

というのが六年前の描写である。

いったいに大宮の役どころは夕霧や雲居雁の世話役が大半を占める。逆に夕霧も大宮を離れては存在しない。三条邸は、そんな夕霧の成長の舞台であつた。

源氏物語における夕霧は「六位宿世」の役を与えられて前半生をすごす。この宿世が前半生の一筋の糸として語られつづけられる。

浅葱にて殿上に返りたまふを、  
(少女)

浅葱をいとからしと思はれたるが、心苦しうはべるなり

(同)

めでたくとも、もののはじめの六位宿世  
(同)

六位など人の侮りはべるぬれば、  
(同)

そしてやっと五位となつたのち、今に到つても、

「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、もののをりをりに思し出

でければ、  
(藤裏葉)

と思ひ出される。当該部分は、この直後である。

こうして源氏物語の作者は夕霧の成長を一筋の糸として設定して、長く手離さない。当の三条邸の描写は、その筋にそつて物語を読ま

されつつけてきた読者が出会うものなのである。

やはり「童稚尽成人」の物語は強いというべきであろう。ところがそれを裏に隠して、表立ってとられた表現が「園林半喬木」だったのである。半ばを暗示にゆだねた筆法は、見事だといわざるをえない。

そしてまた、この夕霧成長譚の中には、別の白詩がはめこまれている。一つは引用と認めることに問題はあがあるが『孟津抄』が「贈駕部吳郎中七兄」（巻十九）を「少女」に引用したとすると<sup>(9)</sup>、もう一つは「三月三十日題慈恩寺」を「藤裏葉」に引用するところ<sup>(10)</sup>で、前者はまさに夕霧と雲居雁との対話に庭園の景などが用いられ、後者は大宮の慈恩を暗示するものである。

その上で当の個所に及ぶわけで、引用の面からも周到さが感じられる。

しかし「六十六」は半ばの特質が嘆老にある。第一、二句、第五句などにそれが見られる。再掲すれば、

病知心力減 老覺光陰速……鬢糸千万白  
のごとくである。

さてこそ、当の源氏物語は、これらも巧妙によび込みつつ叙述が次のように進むと思われる。

「遣水の水草も掻きあらためて、いと心ゆきたるけしきなり」は白詩の、

池草八九緑…… 引水穿深竹 雖有潺湲声

による翻案と思われるが、この「池草八九緑」は「鬢糸千万白」と対句をなす。つまり表面は「池草云々」の翻案ばかりで、これまた裏に「鬢糸千万白」を隠すのである。

そればかりではない。源氏物語を読み進めてゆくと、この先何と老人の描写が多いことか。夕霧と雲居雁の物語をしているところへ、古人どもの、まかで散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、参うのぼり集まりて、

（藤裏葉）

といい、庭園を見る者は俄然老人となる。「古人ども」はまた、

古人ども御前に所えて神さびたる事ども聞こえ出づ。（同）

と昔話にふけるが、一方折しも訪れてきた太政大臣（頭中将）、これまた三条邸に育った大臣が、

この水の心尋ねまほしけれど、翁は言思して  
というばかりか、

そのかみの老木はむべも朽ちぬらむ植多し小松も苔むしにけりと歌う。「わかき人達成人して、我身は老木となれると也」（細流抄）となれば、もうこれは「六十六」そっくりである。

そしてさらに、

老人どもも、かやうの筋に聞こえあつめたるを、  
と古人がまた登場させられる。

こうした庭園をとりまく老人どもは、はたして偶然に構想された

ものだったのだろうか。右の人びとは、いずれも庭園を昔から見てきた人たちであった。

その上で、もう一つの想像を書きとめておきたい。何といってもこの邸の女主人公は大宮だが、大宮は二年前の三月二十日に没している。それを今も夕霧は、

なれこそは岩もあるじ見し人のゆくへは知るや庭の真清水

と問いかける。庭園の清水が岩をもれて流れる。そして清水こそがこの家の主だという。もし主なら「見し人のゆくへ」も知っているかと尋ねる。「見し人」とは大宮のことだ。

いわば大宮も、庭園にのぞむ「老人」のひとりではないか。

そしてこの主たる「岩もある清水」に、

……倚高石 引水穿深竹

という「六十六」の主を引き当てることはできないだろうか。もしそうなら、

雖有潺湲声 至今聴未足

とは、今もなお潺湲の声を大宮が聞きたいと欲しつづけていることになる。大宮はどこにいいのか。すぐ傍にいいのか、いないのか。

私には、夕霧の一首こそ「六十六」の深奥の踏襲にほかならないと思える。

もし生きていたら大宮がこの年六十六歳だったとすれば、申し分ないのだが。

## 五 六十六——竹河

白詩の「六十六」は、もう一度竹河に引かれるとされる。<sup>(1)</sup>

この桜の老木になりけるにつけても、過ぎにける<sup>よはひ</sup>齢を思ひたまへ出づれば、あまたの人に<sup>おと</sup>後れはべりける身の愁<sup>うれ</sup>へもとめが

たうこそ

(竹河)

という左近中将のことばについてである。

このせりふの要は木の成長につれて年を経たことが思われ、死におくれた身がづらい、といったところであろう。そう考えると、これまたどこにでもありそうな内容で、必ずしも白詩を引合いに出さずともよきそうに思われる。とくに桜などというときわめて日本的で、白詩は遠い感じである。

ただ、右で問題としたような成長してくるものと老いてゆくものとの対比は、ここにもある。いやむしろそれを中心とした描写をあえて挿んだとさえ言うべきで、その点における考え方の傾向の一致は、看過しがたい。

あえていえば、そうした傾向の一致する二者と考えるべきであろう。

そこで共通点を問題とすると、今眼前の桜の老木が話題となり、その木が若かったころ、大君と中の君のふたりが自分の木だと争ったことが回想される。そのふたりが今や男性の目を引くばかりにな

っており、まさに、

### 童稚尽成人

というぐあいである。

一方「老」の側に立たされているのが左近中将である。ただ彼は「二十七八のほど」だとあり、計算によると二十五歳のはずだといわれる。この年で「老」の側に立つのもわれわれから見れば落着かないが、せりふは十分に年寄りじみている。

また別に「老」の側に用意された人物がいる。彼女たちの母親玉鬘である。彼女は時に四十八歳、あるていどの年であらう。先だった個所では故柏木のことを思い出して、

泣きたまふも、古めいたまふしるしの涙もろさにや。(竹河)

と老人扱いである。すでに未亡人であり、鬘黒なきあとの邸を守っている。

右の藤の裏葉における大宮のような故人はこの場合鬘黒で、そうしたなき人びとを引合いに出してくる様子は「あまたの人に後れはべりける」というところに示されていた。鬘黒以外に竹河で言及される故人は、かつての頭中将（故致仕の大臣）、柏木（故大納言）などで、過去の人影は、決して少くはない。

そうした故人の濃い影の中で、一方に動く人影が二人の華やいた姫君である点、藤裏葉とは大いに印象がことなる。

じつは六十六を書いた時、白楽天は孫を得ている。あの阿羅（元

和十一年（八一六）生まれ）が太和九年（八三五）に談弘誓に嫁ぎ、この年十月に女兒引珠を生んだのである。

詩六十六の周辺に、こうした若々しい生命の華やきがあることは、源氏の竹河に見られる姫君たちの華やぎと、ふしぎに雰囲気は近い。幼くおはしましし時、この花はわがぞわがぞと争ひたまひしを

（竹河）

というあたりにそんな幼児を思い出すのは、私だけではあるまい。

もし竹河に六十六の詩も連想すべきだったら、むしろこの若々しさを「童稚尽成人」中から汲みとるのがよいであらう。

### 六 楊柳枝詞——若菜下

源氏は四十七歳となった正月十九日、六条院で四人の女性にそれぞれの楽器をあたえ、その演奏を楽しむ。そしてひとりひとりの様子を克明に語る。女三の宮、明石の女御、紫の上そして明石の君についてである。

その中の女三の宮については、

にはひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。桜の細長に、御髪は左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。

（若菜下）



のごとくである。ちなみに、女三の宮が柳をもつてたとえられるのに対して、明石の女御は藤、紫の上は桜、明石は花橘である。

ところで、この女三の宮の描写に対して白詩の引用がいわれてきた。<sup>(12)</sup>「楊柳枝詞」(巻三十二)がそれである。

依々たり嬋々たりまた青々たり

依々嬋々復青々

勾引す春風無限の情を。

勾引春風無限情

白雪の花繁くして空しく地を撲ち

白雪花繁空撲地

緑糸条弱くして鶯に勝へず。

緑糸条弱不勝鶯

とくに後半の二行あるいは最終行が指摘される。たしかに「青柳の、わづかにしだりはじめたらむ」様子は、依々嬋々とした青柳の姿とひとしい。

しかし白詩の最終行「緑糸条弱不勝鶯」とは、鶯がとまることすらできないほどに弱いというのだから、「鶯の羽風にも乱れ」というのとは、別である。そうくわしく見ると、一見するほどは似ていない。

そこで慎重な意見もある。古典文学全集本の頭注では、この白詩をあげながら、白詩が「鶯の枝にとまる関係であるのを、その羽風との関係から、いっそうの微細さをいう」とあり、『河海抄』がひく具平親王の歌、

鶯の羽風になびく青柳のみだれてものを思ふころかな  
を示す。積極的な意見は何もいわないが、白詩の引用という通説に

疑問をもつ態度であろう。それよりむしろ具平親王の和歌によるといいたい気配すらある。

『河海抄』の指摘が正しいなら、柳が鶯の羽風によってなびくという卓抜な表現は、具平親王の功に帰するべきであろう。それを源氏が借りたことになる。

しかし、鶯の羽風になびくことも、結局は柳が鶯に勝えられなかったことの一種である。具平の前に白詩がなかったとは断言できない。

むしろ当時の誰でもが、具平の一首を見ると白詩を一步進めたものと気づいたのではなからうか。源氏物語の読者も同じで、これを読むと具平を思い、さらに白詩を思い浮かべたにちがいない。それはもとより、源氏作者の意図にかなったものであった。

そこで楊柳枝詞をここに重ねることは、何も女三の宮の肢体が楚楚としたものだったという、形の描写のためだったわけではない。

これから後の女三の宮がたどる運命を考えれば、引用の白詩は、どの部分をとっても、その運命が暗示されているではないか。

柳は春風の無限の情を引きつけるという。

白雪のような花は、しきりに空しく散るという。

鶯にとまられると、折れてしまうという。

すべてそれほどに依々嬋々としているのである。

われわれは右のような条々を比喩として読む以外に手がない。

「春風をひきよせてかぎりしられぬ氣持をおこさせる」とは田中克己氏の訳だが、その氣持をおこさせられたのが柏木だった。

女三の宮は柏木によって、空しく花を散らしたといつてよいだろう。尼となり早ばやと身まかることにもなる。その運命は田中氏によると「やがて白雪にもまがう花が地にはらと散り」ということになる。

こうして、一首全体をよび込むべく引用された楊柳枝詞は、見事な伏線となつていよう。

じつは、この一篇は楊柳枝詞全八首の第三首にあたる。だからもう七首が並んでいるので、もしそれらを知悉した読者がいたら、全体八首がすべてをあげて源氏物語に参加していくこととなるだろう。七首の中にはこのような一首もある。

葉は濃露を含んで啼ける眼のごとく

枝は輕風なやみかぜに嫋なやみして舞へる腰に似たり。

小樹 攀ち折らるる苦しみに禁へず

乞ふ君 両三条を留め取れ。

葉含濃露如啼眼

枝嫋輕風似舞腰

小樹不禁攀折苦

乞君留取兩三条

(第七首)

これなどはまるでそっくり人間ではないか。しかも嫋々とした若い美女で攀じ折られることの比喩まである。

元へ戻つて第二首をかりた形容は『紫式部日記』の小少將の君の描写にも似ているという。もしそうなら、小少將も同じ運命をたど

らなければならなくなるから、大変である。

それを引いてみよう。

小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。

(四六)

同じく柳をもつて喩えられていても、ただ柳のようだというだけで、白詩のおもかげはない。そのことは逆に、若菜下のこのくだりにあえて白詩をひびかせ、その喩とするところを伏線として用いたのだということを、証明してくれるであらう。

## 七 偶吟——帚木

雨夜の品定めとして名高い帚木の一節がある。ようやく成人しようとする源氏をまじえて、男たちの女性論がつづくところで、すでに白詩の「議婚」などと同じモチーフが見られるものであることも、よく世に知られている。

次はその一節である。

あまりむげにうちゆるべ、見放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづからかろきかにぞおぼえはべるかし。繫つながぬ舟の浮きたる例たとひも、げにあやなし。

(帚木)

左馬頭が夫に対する女の態度を述べるくだりで、あまり夫を寛大に扱うのも考えもので、軽んじられてしまうだろう。繫がない舟が浮き出してしまふ例もあつて、よくない、というのである。

そこで、この「繫がぬ舟の浮きたる例」という表現に対して、從來白詩の引用が指摘されてきた。<sup>(14)</sup>「偶吟」(巻三十六)がそれである。

人生の改故は故より窮りなし  
昔はこれ朝宮 今は野翁。

人生改故無窮  
昔是朝宮今野翁

久しく形を朱紫の内に寄せしかど

久寄形於朱紫内

漸く身を拙んで蕙荷の中に入る。

漸抽身入蕙荷中  
荷衣惠帶  
是楚詞也

情なき水は方円の器に任せ

無情水任方円器

繫がざる舟は去住の風に随ふ。

不繫舟随去住風

なほ鱸魚專菜の興ありて

猶有鱸魚專菜興

来春はあるひは擬す 江東に往かんと

来春或擬往江東

この第六句に類似の語句がある。

ただ、同様の句は他にも見られる。それに関しては新刊の「新編日本古典文学全集」の源氏物語に詳しい紹介があるので、その訓み下し文に原文をそえて、左にあげてみよう。

汎はとして繫がざる舟のごとく、虚にして遨遊する者なり(汎若

不繫之舟、虚而遨遊者也)『莊子』列御寇第三十二、第一

澹たとして深泉の静かなるがごとく、泛はとして繫がざる舟のごと

し(澹乎若深泉之静、泛乎若不繫之舟)

賈誼「鵬鳥賦」『文選』卷十三

身を觀すれば岸の額に根を離れたる草 命を論すれば江の頭に

繫がざる舟(觀身岸額離根草 論命江頭不繫舟)

羅維(嚴維力)『和漢朗詠集』巻下、無常、七九〇  
なお『文選』には李善の注があつて、

莊子老聃らうたんに曰はく、その居や淵にして静かなり、それただ人の心か。鵬冠子に曰はく、泛泛として繫がざる舟のごとしと(莊子老聃曰其居也淵而静其唯人心乎鵬冠子曰泛泛乎若不繫之舟)

という。『鵬冠子』は作者不詳。漢書芸文志に見える鵬冠子は楚の人で深山におり、鵬をもつて冠としたという。隠者だとされる。

新編古典全集本の注者は、これらの文献によって「『文選』あるいは『莊子』などによって察しられる中国の成句を用いたとみたほうがよいだろう」という。

しかし私見はことなる。右のものを通覧すると『文選』と朗詠集を例として生命を舟にたとえる習慣があつたことが知られる。

一方『莊子』の例は苦勞をする巧者や憂える知者に対して無能の者は氣ままに遊ぶから、無能者がよいという主張で、『莊子』一流の無の価値をとくものである。

つまり右の二者は別の内容で一つにするわけにはいかない。

そこで白詩だが、これまた右の二者とも別で、これは人生に定まることがないことをいい、その改故に身をゆだねて生きたいというものである。束縛してみても定まりがないのなら、束縛なく生きようという趣旨だ。

その意味でいえば「鵬冠子」はこれに一番近いかもしれない。じ

つは「偶吟」は会昌二年（八四二）七十一歳で刑部尚書をもって致仕するころの作であらうと思われるが、堤留吉氏は「七十歳前後の作には、例えば」としてこの詩ほかをあげ、その「ように、概して隠逸に関する総合的ともいえるもの（<sup>16</sup>）をしている」という。堤氏の見るところも「鵲冠子」と近いであらう。

そこで帯木にとっての右の三者の親疎を吟味すると、ひとしいものは白詩と「鵲冠子」であり、他のものは内容が別である。源氏が唐突に「鵲冠子」を引くいわれはあるまい。やはりここは「偶吟」を引いたと考えなければならない。

ただ、一見して知られるように、偶吟は「不繫舟」を是認するが、源氏はこれを「あやなし」とする。むしろ思想においては逆である。そこに疑念があるかもしれない。

しかし源氏は引用に先立って、こういう。

すべて、よろづのこと、なだらかに、怨<sup>を</sup>すべきことをば、見知れるさまにはのめかし、恨むべからむふしをも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。（帯木）

つまりここには二つのタイプ、怨じ恨む態度と、ほのめかしかすめなす態度との二つをあげて、後者の方がよいというのである。

その上で、

あまりむげにうちゆるべ、見放ちたるも、心やすくらうたきやうなれど、おのづからかろきかたにぞおぼえはべるかし。

（同）  
というのだから、先の後者の態度は、さらに「うちゆるべ、見放ちたる」態度とされ、それは「心やすくらうたきやう」だといわれる。つまり「繫がぬ舟の浮きたる」さまは、よいのである。

ところが、この態度が「あまりむげに」あると「おのづからかろきかたに」思われる。だから「繫がぬ舟の浮きたる」さまでよいことになる。要するに基本的には「繫がぬ舟」がよいのだが、度をこすと「あやなし」だというのが源氏物語の主張である。

この場合結論が「あやなし」だということも微妙なニュアンスをふくんでいるように思われる。「あや」がないというのは、いささかの異義申立ての趣をもつ。本来よさそうでありながら悪いから、不条理なのであらう。

また、こうした左馬頭の恋愛論に対して頭中将が、  
ともかくも、違ふべきふしあらむを、のどやかに見しのばむよりほかに、ますことあるまじかりけり。（同）

と結論づけるのも、結局のところ「繫がぬ舟」を是認することになる。

先に白詩を『莊子』や『鵲冠子』と比較し隠逸のことにふれたが、白詩に隠逸の趣を認めたとしても、それは一途に隠逸がよいという詩ではない。『莊子』が疑いもなく「無能者」をよしとするように「不繫舟」をよしとするかという、まったく違う。

偶吟の大前提に「人生変改故無窮」がある。そのために水や舟を欲したのであり、その心の揺れは、源氏と共通のものである。

まさしく、偶吟詩を源氏が引用したということは、人間感情における愛をめぐる機微、変転きわまりない愛の心に「人生変改」の窮りなさを重ねてみたのではなかったか。

偶吟は朝宮と野翁、朱紫と蕙荷とを対比させ、その中に方円の器や去住の風をおいた。男女の感情の中にも、方円の器や去住の風を思い描くことが、愛の要諦なのではないか。まったく乱暴だが、「愛の変改は故より窮りなし」といい、右にもあげた二項に「愛」と「憎」とでもいった単語を代入すれば、偶吟はさながらに恋愛詩となる。

源氏は「繋かぬ舟の浮きたる」とだけ引用するが、前後をふくめた総体から見ると、偶吟の「人生変改」を男女の交情に擬そうとしたものだと思われる。

## 八 草堂記——若紫

白楽天は江州にあった時、いわゆる廬山の草堂をいとなんだ。それにとまなう詩文も多く作り、すでに「香鑪峰の下に新たに山居を卜し、草堂初めて成る。偶ま東壁に題す」(香鑪峰下新卜山居草堂初成偶題東壁)(卷十六)の重題詩については、その源氏物語への引用を見た。<sup>(17)</sup>

そこでもふれた「草堂記」(卷四十三)は、この新居の作の基本となる一編だが、さてその部分、

雑木異草その上を蓋覆し、緑陰

蒙々として朱実離々たり。その

名を知らず。四時一色なり。

が、源氏物語に引用されるとされる。<sup>(18)</sup>

名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、(若紫)

白は雑木異草つまり「いろいろに」「まじ」る木や草の「不識其名」という。要するに「名も知らぬ、いろいろの木草がまじっている」というのだから、花であることを除くと、似た内容だということとはできるであろう。

しかし何としても僅かなことは遣いである上に一般的な内容でもあり、そう簡単に白詩を引用したとはいえないがたい。

ここではもう少し広く眺める必要があろう。「草堂記」は、堤留吉氏の考へによると、全体が五段にわかれ、第一段は地を卜して草堂を作り、元和十二年に完成したこと、第二段は草堂の結構、第三段は草堂の四周景観、第四段は平生の志の成就を述べたとする(第五段については言及がないが、篇末記といったあとがきに当る部分であろう)。

この中で堤氏は第三段がもっとも重要な部分だとする。微に入り細を穿って草堂のもつ自然を描く部分である。しかしそれも、第一

段で述べられる廬山の中にある立地条件と深く結ばれている。すなわち、

匡廬は奇秀にして天下の山に甲  
たり、山の北の峰を香爐峰と曰  
ひ、北寺を遺愛寺と曰ふ。峰寺  
を介する間、その境勝絶にして  
また廬山に甲たり。

廬山。

の中での話である。

ところで、さきに言及した「草堂記」を引用したかといわれる  
「若紫」の巻は、周知のとおり光源氏がのちの紫の上を垣間見る段  
だが、その舞台は、

北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。

(若紫)

と始められる、北山のなにがし寺である。これは妙に、山北の峰に  
あるという遺愛寺を連想させる。もしこの設定の一致が偶然でない  
としたら——源氏の作者の頭に楽天の草堂が浮かんでいたとしたら、  
以下に源氏の作者が描き進めるなにがし寺の様子は、草堂のそれと  
似ているはずである。

描写を拾ってみよう。

小柴なれど、うるはしくしわたして、きよげなる屋廊などつつ  
けて、木立いとよしあるは、

(若紫)

同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覽ぜさせんと、

(同)

げに、いと心ことによしありて、同じ本草をも植ゑなしたまへ  
り。月もなきころなれば、遺水に篝火ともし、燈籠などもまゐ  
りたり。南面いときよげにしつらひたまへり。

(同)

山風ひややかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞  
こゆ。

(同)

法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、  
いと尊く、滝の音に響きあひたり。

(同)

明けゆく空は、いといたく霞みて、山の鳥ども、そこはかとな  
う囀りあひたり。名も知らぬ本草の花どもも、いろいろに散り  
まじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらし  
く見たまふに、

(同)

これらは、一つのイメージをもつて叙述されたはずのもののだが、  
それは京北郊の山中「やや深う入る所なりけり」(若紫)といった  
場所、高僧が行います閑居といった趣であつたらしい。

山気にみち、水音が清らかで本草が彩りをそえる。時として小鳥  
や鹿の鳴き声もきこえてくる。その中に小柴垣をめぐらしてきよら  
かな堂屋を建てたものがそれである。

一方、作者が想起し、叙述がみちびかれる先蹤があつたとすれば、  
この作者にとって格好のものが廬山の草堂であつたこともよく理解

できるであろう。ほかに、何があるだろうか。かりに複数の一つとしても、その有力なものが白氏草堂だったことは間違いない。

ましてや次に述べるように「須磨」では明らかに「草堂記」の閑居をまねているのであれば、この部分の閑居に「草堂記」を思い出していた可能性は強い。

そしてまた、廬山の草堂は三月二十七日に移り住むことができるほどに竣工し、四月九日に落成式を行なったという（「草堂記」）。一方源氏の方も最初の設定は「三月のつごもりなれば」とあり、時期を一致させる。「三月つごもり」が当初から決定していた筋だとすれば「草堂記」の日付はたいへん都合よかったであろう。

もちろん草堂には三月だけいたわけではない。四季折々の描写をもつように住みつづけるわけだが、しかしその期間は長くない。元和十二年（八一七）三月二十七日から二年間、元和十四年（八一九）に忠州刺史に着任するまでで（任命は前年十二月二十日）、しかも忠州到着は同年三月二十八日である。「三月つごもり」は偶然であろうが、「三月つごもり」は廬山閑居の首尾に据わっている。

そしてこの二年という期間は必ずや、

これなん、なにがし僧都そうどうの、この二年籠ふたてりはべる方かたにはべるなる  
(若紫)

という年月の決定のもととなっているにちがいない。物語にとつては何年でもよいはずだから、この二年の選択は白の草堂二年に準じ

たものであろう。

すでに、この草堂での他の詩を源氏が多く引用していることはふれた。<sup>(20)</sup>それは四か所にも及び、「草堂記」を加えれば六か所となる。

この引用の一面は江州流謫を須磨に擬するところから起こっていたが、それに先立つ伏線ともなっており、北山の閑居に草堂が用いられていたこととなる。「なにがし僧都」の体験を、主人公は後に自ら体験することともなった。

そこで少し「草堂記」を眺めてみたい。

まずは、

三間両柱、二室四牖しうぶ、広袤豊殺、三間両柱二室四牖

一もら心力こころぢからに称なづへり…… 広袤豊殺、一称心力……

木断きぎるのみにして丹を加へず。 木断きぎ而已不加丹、

牆なづか圯やなるのみにして白を加へ 牆なづか圯や而已不加白、

ず。城階は石を用ひ、罽毼は紙 城階用石、罽毼

を用ひ、竹の簾、紵の幃、すべ 用紙、竹簾紵幃、

てこれに称ふ。 率称是

という建物を「きよげなる屋廊」といっていけない理由はないだろう。白はこの建物で「一宿するに体寧やすみく、再宿するに心括こころづかけ、三宿して後、頽然嗒然として、その然うして然ることを知らず」（一宿体寧、再宿心括、三宿後、頽然嗒然、不知其然而然）という。自在な心を養う建物である。



また源氏の作者は「涼しき水の流れ」「遣水」「滝のよどみもまきりて、音高う聞こゆ」「滝の音に響きあひたり」と水の音を問題にするが、草堂にも「仰いで山を觀、俯して泉を聴く」（仰觀山、俯聽泉）「台の南に方池あり」（台南有方池）「堂の東に瀑布あり、水懸ること三尺、階の隅に瀉あふぎ石の渠に落つ」（堂東有瀑布水懸三尺瀉階隅落石渠）その他水は重大なモチーフとして描かれる。

こうした水が密接に関係するであろう。草堂は「盛夏の風氣も八月の如し」（盛夏風氣如八九月）というが、源氏も「山風ひやかに吹きたるに」といい、山中の爽涼の氣をひとしく享受している。すでにふれたように、同じ草堂を叙する詩や記はこれにとどまらず、その一つ「香鑪峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」の一連が源氏に引用されるが、その中にも「北の戸は風を迎へて夏月涼しく」（北戸迎風夏月涼）とあり、水と涼との叙述は枚挙にいとまもないほどである。

また、その同類の詩「香鑪峰下新置草堂即事詠懷題於石上」には、  
時に聚れる猿鳥あり      有時聚猿鳥

終日 風烟空し

終日空風烟

……

……

倦鳥茂樹を得

倦鳥得茂樹

と見える。これら小動物への言及は「草堂記」にはないが、源氏には上掲のように「山の鳥でも、そこはかとなう囀りあひたり」とあ

る。

源氏にはこの他に鹿の描写がある。これも右の詩の重題第二首に、  
野麋林鶴はこれ交遊      野麋林鶴是交遊

とあるものに匹敵するであろう。

そしてまた源氏に「いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに」というのは、「草堂記」にもどって、

春は錦繡の谷の花あり

春有錦繡谷花

というのを思い出させるであろう。源氏でも春の本草の描写として錦をいうが、「草堂記」もまた春の錦をいうのである。

この源氏の個所は、最初に「草堂記」の応用かとして紹介したところである。そこに該当する部分として引かれた「草堂記」とは別に「春有……」と語られている。

さて、このように見てくると、北山の僧都の閑居に、先蹤として廬山草堂が踏まえられていたことは、やはり認めるべきではあるまいか。源氏の作者は須磨の閑居ともども、白をモデルとして応用したと見るべきである。

ことに北山は「なにがし僧都」の閑居であり、わびしさを強調する須磨の謫居とは別で、いっそう内容が近い。

当該個所も、そうした全体の中の一部として描写が利用されたものであろう。

そうなると必然的に次のようなことが起こる。北山＝廬山の中か

ら姿を見せはじめるのが紫の上である。まるで香鑪峰の、たちのぼる香の煙に包まれた山の中からわき出るように登場したのがヒロインとしての紫の上であった。

月明りの中で、かぐや姫まがいに姿を消すこのヒロインは、それなりに出現にも趣向が凝らされていたはずである。その一つが桜であることは誰の目にも鮮かで、

山の桜はまださかりにて、入りもておはするまゝに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、  
（若紫）

と語られる。後のちにも桜をもつたとえられる紫の上は、かのコノハナサクヤビメとひとしい立場を与えられているというべきだが、さてこの花の精のような神女が現われる現われ方に、もう一つ趣向を凝らせば、彼女は香炉からわき出た美女であったという語り方も可能だったのではないか。右の「霞のたたずまひもをかしう見ゆ」というのは、香炉のことであつたかもしれない。

## 九 草堂記——須磨

右にいくどもふれたように、源氏は須磨の巻で「草堂記」を利用する。

文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ（須磨）  
といい、白氏文集と一つの琴をもつて須磨へいったとする。

これは文集の一節を引用するといふものではなく、明らかに

「文集」をもつていったというが、しかし「草堂記」には、

堂中に木の榻四、素

堂中設木榻四、

屏二を設け、漆の琴

素屏二、漆琴

一張、儒道仏の書各

一張、儒道仏

おの三両巻あり。

書各両三巻

とあつて、この文を引用したと見ることも可能である。げんに多くの研究者がこの引用を認めている。<sup>(21)</sup> 文集のみならず琴にまで言及するところを見ると、白楽天の草堂に入ったのとひとしい感情を源氏に認めていたと考えてよいであろう。

それでは、その感情とはいかなるものか。須磨を江州赴任とひとしいものと考えようとしたことはすでに述べたが、<sup>(22)</sup> さらにこまかく心情を規定しているように思える。という理由は、

えさらずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなく  
ことそぎて、  
（須磨）

として文集と琴だけにしたというからで、「ことそぎ」たる生活の中で「草堂記」が顧みられているのである。

白が晩年道教や仏教に心ひかれたことは周知のとおりだが、「草堂記」の中でも自然に親しみながら、老荘的境地を語る。すなわち、

物に誘はれて気随ひ、

物誘気随、外適

外適ひ内和す。……

内和。……噫、

ああ、およそ人一屋を豊かにし

凡人豊一屋華一

一簣を華かにしてその間に起居

するも、なほ驕穩の態あるを免

れず。いま我ここに物の主たり。

物至るときは知を致す。おのお

の類をもつて至れり。またなん

ぞ外適ひ内和し、体寧く心恬か

ならざるを得んや。

簣而起居其間、

尚不免有驕穩之

態。今我是為物

主。物至致知。

各以類至。又安

得不外適内和、

体寧心恬哉。

と述懐する。この心境をアーサー・ウェーリーは「彼の精神が偉大

な『外部的な満足と内部的平和』に融けこんで行くのが解った」と

いう卓抜なことばで語っている。<sup>(23)</sup> こうした「体寧心恬」であること

を願ひ、それに足るものばかりを身辺とすることが「ことをぞぎて」

あることだったのであらう。

白は「草堂記」の終末近くこんなこともいつている。

必ず左手に妻子を引き、右手に

必左手引妻子、右

琴書を抱へて、老をここに終へ

手抱琴書、終老於

て、もつてわが平生の志を成就

斯、以成就我平生

せん。

之志。

源氏は妻子を都においてきたが、同じようにここで老を終えよう

とする志も、あったかもしれない。

源氏はこの須磨行の決意にともなつて、

領じたまふ御庄、御牧よりはじめて、さるべき所どころの券な

ど、みな奉りおきたまふ。

(須磨)

という。すべて世俗を離れた出立である。

白氏の草堂に入る心境は、そうした源氏の心境とひとしいものと

みなされるであらう。それを道教的とか老荘的とかと概念化してし

まうことは間違いだが、「草堂記」に流れる閑適の精神、あるいは

草堂を歌った別の閑適詩の世界、そうした閑適こそが、いまの源氏

の心境だったことを、源氏の作者は「草堂記」をかりて表現したか

ったのだと思われる。

源氏の心境を「流謫」ということばでよべば、それは距離のある

ものとならう。そのようにこまかく区別した上での「閑適」こそが、

源氏の意志の積極性にふさわしいものだったのである。

# 注

(1) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』一二ページ。

丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』一〇八ページ。

(2) もっともアーサー・ウェーリーは政治的疑惑を避けるためにと

られた態度だと見る(『白楽天』〈花房英樹訳〉三八三ページ)。

(3) 注1の古沢氏の著書一一ページ。

(4) 拙稿「引喩と暗喩——源氏物語における白氏文集、「凶宅」な

ど」『日本研究』第一集 一九八九年五月。

(5) 「洛詩に序す」(序洛詩) 文集巻七十。

(6) 引用の指摘は古いが、近ごろの研究書でも注1の古沢氏一一ペ

ージ、丸山氏一〇八ページ、また水野平次『日本文学と白楽天』三七八ページに見え、注釈書の頭注はすべて言及する。

(7) 右の古沢、丸山両著に同じ。

(8) 日本古典文学全集『源氏物語』第三卷四四七ページ。

(9) 拙稿「引喩と暗喩」(八)では引用とすることを控えた。

(10) 拙稿「引喩と暗喩」(六)。

(11) 注6の古沢、丸山両著に同じ。

(12) 注6の古沢、丸山両著に同じ。また注6の水野著書三八二ページ。

(13) 田中克己『白楽天』(漢詩大系) 三三五ページ。

(14) 注6の古沢、丸山両著に同じ。また注6の水野著書三九六ページ。

(15) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語』一、四三七・四三八ページ。

(16) 堤留吉『白楽天研究』一二八ページ。

(17) 拙稿「引喩と暗喩」(七)。

(18) 注1の古沢著書および丸山著書一〇七ページ。

(19) 注16の前掲書二七一ページ。

(20) 注17と同じ。

(21) 注1の古沢氏の著書一一ページ、丸山氏の著書一〇七ページ、また古典全集など。

(22) 注17と同じ。

(23) アーサー・ウェーリィ『白楽天』(花房英樹訳) 二五九ページ。

なお、文中に引用した本文は、次のものによる(ただし、白氏文集

は他本を参照した個所がある)。

(一) 『源氏物語』阿部秋生・秋山虔・今井源衛注・訳『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九七〇年—一九七六年。

(二) 『白氏文集』白氏長慶集 上下』(長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』汲古書院 一九七四年。